

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART

PRESS RELEASE vol.01

2020年11月吉日

TokyoTokyo
FESTIVAL



第13回恵比寿映像祭、テーマおよび作家第1弾 発表

www.yebizo.com

第13回恵比寿映像祭

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2021

映像
の
気
持
ち

E-MOTION GRAPHICS

令和3（2021）年2月5日（金）～2月21日（日）

《15日間》月曜休館／10:00～20:00 ※最終日は18:00まで／入場無料 ※定員制のプログラムは有料

会場 | 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／

恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

TOP MUSEUM 東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

開催概要

恵比寿映像祭は、平成21（2009）年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的かつ、領域横断的に紹介する映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。第13回開催となる今回は、「動画」であるということ、に焦点をあて、歴史的な作品も参照しながら、映像の楽しみ方を広げるテーマをかかげました。これまでに培った地域とのつながりや国際的なネットワークを支えに、さらなる充実と発展をはかります。

[名称] 第13回恵比寿映像祭「映像の気持ち」

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2021:
E-MOTION GRAPHICS

[会期] 令和3（2021）年2月5日（金）～2月21日（日）《15日間》月曜休館

[時間] 10:00～20:00 ※最終日は18:00まで

[会場] 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／
恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

[料金] 入場無料 ※定員制のプログラムは有料

[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・アーツカウンシル東京／
日本経済新聞社

[共催] サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

[後援] TBS／J-WAVE 81.3FM

[公式HP] www.yebizo.com

[公式SNS] Twitter: <https://twitter.com/topmuseum/>
Instagram: <https://www.instagram.com/yebizo/>

恵比寿映像祭のミッション

映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバル

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断するフェスティバルとして、2008年度（2009年2月）より開催され、今年度で13回目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、東京都写真美術館の全フロア、恵比寿ガーデンプレイスおよび地域に広がる文化施設と共に開催しています。映画、アニメーション、実験映像、ドキュメンタリー、現代美術ほか、多様なジャンルの映像芸術表現が一堂に揃います。

この恵比寿映像祭のカッコのロゴが象徴するのは、カッコの中に入れて、皆で映像について考えてみよう！という姿勢です。

1 映像文化を紹介・体感する

多くの人々が多様な映像芸術表現に触れる「開かれた」
機会（豊かな感性を育む機能）

2 映像文化を創造する

新進作家の発掘・支援（作家の跳躍台としての機能）

3 映像文化の楽しさと出会う

フェスティバルを通じて映像文化の楽しさと出会い
ジャンルや地域の垣根を越え交流



恵比寿映像祭
Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions

第13回恵比寿映像祭 映像の気持ち

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2021 E-MOTION GRAPHICS

映像（動画）は、テレビ画面、スマートフォン、街中や車内の広告ディスプレイ、ゲーム、自動販売機、あるいはウェアラブルな端末など、21世紀の都市生活のいたるところにあふれています。明滅する光に過ぎない映像を前に、わたしたちは、笑ったり、泣いたり、驚いたり、怒りや欲望を喚起されたり、触れられないものや行くことができない場所へ思いをはせたり…と気持ちを動かされています。さらに世界的なパンデミックを契機に、物理的な移動や直接的な交流の代替手段のひとつとして、動画配信や映像を介した遠隔コミュニケーションの普及が加速し、映像との付き合い方はさらに拡がりを見せています。

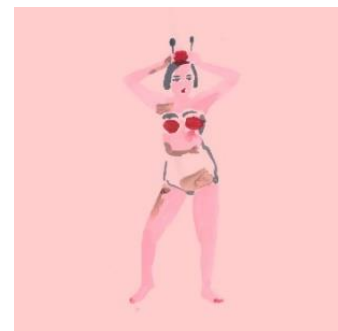
第13回恵比寿映像祭では、見る人の感情を動かす映像の力に着目し、あらためて、「動画」であるということ、について向き合いたいと思います。静止画が動き出すことそのものに驚き目を見張った映画前史の時代から、アナログからデジタルへ、平面から3D空間へ、技術の変遷やメディアの多様化とともに、動画表現はさまざまに変化を遂げ多様になってきました。さまざまな工夫により編み出されてきた動画表現の原理とその歴史を参照しつつ、映像（動画）の魅力を楽しむ手がかりを提示し、さらなる拡張を続ける同時代の映像のありかたと、あたりまえのように映像とともに生きる現在を見つめなおす機会をつくります。

第13回恵比寿映像祭アーティストック・ディレクター 岡村恵子

映像には見る人の感情を動かす力がある。
私たちを取り囲むさまざまな動画表現の成り立ちや違いをひもときながら、
映像とのつきあい方を考えていきます。

● 動画表現の成り立ち

今日私たちの身の周りには映像は実に多様です。それらの表現を成り立たせるまでには、さまざまな工夫の歴史がありました。同時代の映像表現を紹介しながら、そのもととなる技法を、先駆的な作品とともに参照することで、わかりやすく動画表現の成り立ちをひもときます。



シヤマザキ 《とにかくなにかをはじめよう》2020年

● 映像（動画）の質感

見る人の気持ちを左右する映像の質感にはどんな違いがあるでしょうか？ドローイングで表現された動きは、手業の朴訥さならではの情感を持ちます。機械の介在によって実現される表現にも、それぞれの美学や思想が託されています。



チョ・ヨンガク 《道路は流星のように》2019年 [参考図版]

● 映像の作用／映像による擬人化

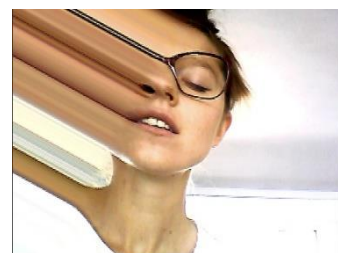
動画が用いられることによって、無機質なものが、まるで生きているかのように感じることがあります。映像によって、現実と虚構、自然と人工、人と人でないもの——その淡いが浮き彫りにされます。



トニー・アウスラー 《1, 2, 3》
1996年／東京都現代美術館蔵

● 映像とともに生きる現在（いま）

現在若手作家の中には、オンライン上での作品発表を入口に活動を飛躍させる人が増えています。現実空間と仮想空間が錯綜するAR（拡張現実）や、オンライン上で簡便に操作や加工が可能となった動画技術など、情報技術の汎用化とともに広がる新たな映像とのつきあい方について考えます。



ペトラ・コートライト
《sssss/////^^^ ^^》2011年

赤松正行+ARARTプロジェクト AKAMATSU Masayuki+ARART Project

展示



ARとARTの交差領域で活動するアーティスト集団。古典的名画から高次元幾何学図形まで、絵画や写真に命を吹き込み、生き活きとした躍動感と醸し出される物語性を重視した作品を制作している。NTTインターコミュニケーション・センター [ICC](東京) や「Tent London」など国内外で多数の展覧会を開催しており、その一部は無償アプリARARTでも鑑賞できる。メンバーは、赤松正行、大石暁規、神谷典孝、北村穰、白鳥啓、向井丈視、和田純平、バク・ヨンヒョ、他。
協力：情報科学芸術大学院大学 (IAMAS)

赤松正行+ARARTプロジェクト 《ウロボロスのトーチ》2012年
Akamatsu Masayuki+ARART Project, *Uroboros Torch*, 2012

拡張現実 (Augmented Reality) による新たな体験を提案してきた赤松正行+ARARTプロジェクト。パネルや立方体に描かれた絵画に携帯端末をかざして鑑賞する展示によって別の現実を浮かび上がらせる。

カワイオカムラ KAWAI+OKAMURA

展示

上映



川合匠 (1968年大阪生まれ) / 岡村寛生 (1968年京都生まれ)。京都市立芸術大学大学院在学中の1993年にカワイオカムラ結成。初の3DCGアニメーションとなった《ムード・ホール》(2019年)は第14回ANIMATOU国際アニメーション映画祭(2019年、スイス)エクスペリメンタルフィルム部門で最高賞を受賞した。

カワイオカムラ 《ムード・ホール》2019年 [参考図版]
Kawai+Okamura, *Mood Hall*, 2019 [related image]

3DCGアニメーションによって独特の映像世界を作り出してきた異オユニット、カワイオカムラ。最新作《ムード・ホール》の世界を、展示と上映で東京初公開。

渡辺豪 WATANABE Go

展示



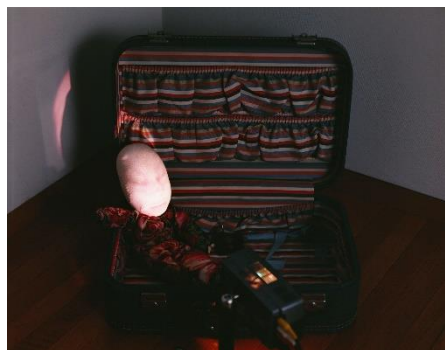
1975年兵庫県生まれ、東京都在住。2002年、3DCGで作成した顔にヒトの皮膚画像を貼り付けた作品《フェイス》を発表。同じ3Dモデルをベースにさまざまなヒトの皮膚画像を当て嵌めた、「フェイス (ポートレート)」シリーズを展開する。数年前より、モチーフを作家自身の身の回りにある本や食器、部屋などへと移し、物質・光学的な法則から離れた変化や動きをみせるアニメーションを制作。自らが何を見ているのかを私たちに静かに問いかける。

渡辺豪 《Aevum》2009-2012年 / タグチ・アート・コレクション蔵
Watanabe Go, *Aevum*, 2009-2012 / Taguchi Art Collection, Tokyo
©Go Watanabe, Courtesy of ANOMALY

学生時代から3DCGによる制作の可能性を探究してきた渡辺豪。実在のモデルの皮膚画像を貼り合わせて作られた、誰かでありながら誰でもない匿名の肖像。

トニー・アウスラー Tony OURSLER

展示



1957年ニューヨーク生まれ、在住。1979年、カリフォルニア・インスティテュート・オブ・ジ・アーツ卒業。メディア技術がいかに人々の心理に影響を及ぼしているかを、絵画や立体作品、ビデオ・インスタレーション、パフォーマンスなど多様な領域を横断する表現で示してきた。世界各地の主要美術館で展覧会を開催。2021年には高雄市立美術館（台湾）で個展を開催する。

トニー・アウスラー 《1, 2, 3》1996年／東京都現代美術館蔵
Tony Oursler, 1, 2, 3, 1996/
Collection of the Museum of Contemporary Art, Tokyo

1970年代半ば以降、マルチメディア・アーティストとして活躍し、今や世界的なアーティストであるトニー・アウスラー。小型プロジェクターの汎用化を受け、いち早く立体物への動画投影を試みた1990年代半ばの先駆的な作例を紹介する。

チョ・ヨンガク CHO Youngkak

展示



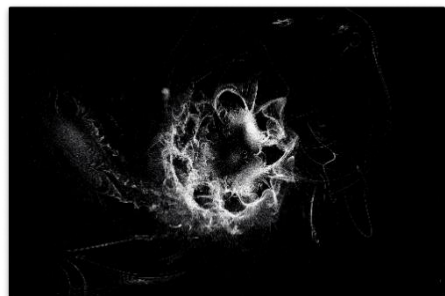
1986年蔚山（韓国）生まれ、ソウル在住のニューメディア・アーティスト。インタラクティブ・メディアを通して、マシンとシステム間の相互作用が生み出すデジタルの感性と新しい体験を提示する。システムの内外にある要素を組み合わせ、見逃されがちな社会的、技術的問題を探求している。最新のデジタルテクノロジー、AI、データサイエンス、ロボティクスを使用し、不確実な想定状況を現在に投影している。アルス・エレクトロニカ（オーストリア）、ELEKTRA（カナダ）、エルミターージュ美術館（ロシア）、ソウル市立美術館（韓国）などで、国際的に作品を発表している。

チョ・ヨンガク 《道路は流星のように》2019年 [参考図版]
Cho Youngkak, *Highway like a shooting star*, 2019 [related image]

これまでもAIによるディープ・ラーニングの技術などを用い、テクノロジーと共存する現代社会を作品化してきたチョ・ヨンガク。出品作品では、都市の道路のイメージを機械学習によって、風変わりな風景に変える。

木本圭子 KIMOTO Keiko

展示



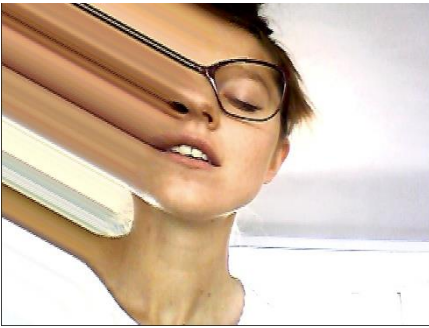
1980年代から独学で数理的手法による造形を始め、2000年前後よりさらに動的表現を探る研究および制作を開始。2003年『イマジナリー・ナンバーズ』（工作舎）を発表、以降精緻な平面作品も展開する。合原複雑数理モデルプロジェクト（2005-2008）、合原最先端数理モデルプロジェクト（2010-2013）などの学術プロジェクトにも参加。平成18年度文化庁メディア芸術祭アート部門大賞受賞。東京都写真美術館、東京都現代美術館、ミラノサローネ・レクサス館など国内外で作品発表を行う。

木本圭子 《Imaginary・Numbers 2006》2006年
Kimoto Keiko, *Imaginary・Numbers 2006*, 2006

数理アルゴリズムを用いたアニメーション表現を独学で探究。言葉で理解するのではなく、身体感覚を刺激される映像を手掛けてきた。

ペトラ・コートライト
Petra CORTRIGHT

展示



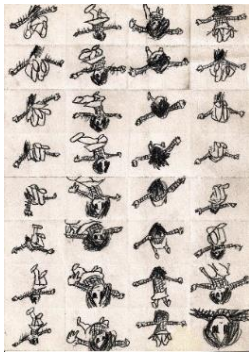
1986年サンタ・バーバラ（米国）生まれ。デジタルファイルを作成・操作し、多面的な実践を行う。彼女のデジタル思考の作品は、印刷物、建築への投影、機械による石彫など様々なアウトプットされる。YouTubeやオンライン展での作品発表によって、2000年代中後半の「ポストインターネット」の作家として認められる。近年はPhotoshopでレイヤーを重ね合わせたデジタル絵画を制作し、アルミ、麻、紙、アクリルなどに描画。画家、グラフィックデザイナー、編集者、プロデューサーを兼ねる彼女の作家像は、現代の視覚文化の特異点ともいえる。

ペトラ・コートライト 《sssss////////^#####》2011年
Petra Cortright, sssss////////^#####, 2011

ペトラ・コートライトは、2000年代よりネット上を表現活動の場とし、加工したセルフイーなどのビデオを発表。その作品はYoutubeにおけるささやかな感情表現をとらえた視覚的な詩のようである。

松本力
MATSUMOTO Chikara

展示



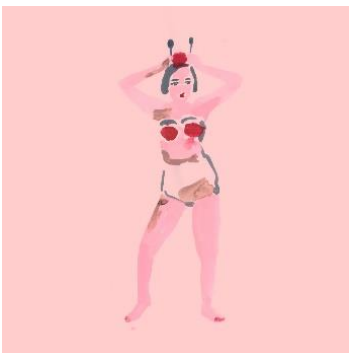
1967年東京生まれ。1991年、多摩美術大学美術学部デザイン科グラフィックデザイン専攻卒業。コマ割りのドローイングによる映像作品を制作。また、オルガノラウンジ、音楽家・VOQとのライブ活動と、手製映像装置「絵巻物マシーン」のワークショップ「踊る人形」を学校や美術館、滞在先で行う。近年は、市原湖畔美術館（千葉）、沖縄県立美術館、港まち協議会（名古屋）での展覧会に参加。個展は「さよならをいって、それからであう旅」（横浜市民ギャラリーあざみ野、2019）、「記しを憶う－東京都写真美術館コレクションを中心に」（東京都美術館、2019）などがある。

松本力《宇宙登山》原画、2006年
Matsumoto Chikara, Original drawing for *Climbing Universe*, 2006

小さなドローイングに透過光を加え、一コマずつビデオ撮影することで、絵による映像表現を追求。「パラパラ漫画」の原理を用いた手描きアニメーションならではの動きが、豊かな抒情性を湛える。

シシヤマザキ
ShishiYAMAZAKI

展示



1989年神奈川県生まれ。東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。同大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了。自身をモチーフとしたロトスコープアニメーションを独自の表現方法として確立。Chanel、PRADAや資生堂などのプロモーション制作を担当し、2018年には「Forbes 30 Under 30 Asia」に選ばれるなど、世界的に活躍。代表作に《YA-NE-SEN a Go Go》(2011)、《やますき、やまざき》(2013)、一日一個の顔を毎日作り続けるプロジェクト「MASK」（2010～現在）などがある。個展「談 TONGUE」（Vacant、東京、2019年）では、陶芸作品を中心に発表。

シシヤマザキ《とにかくなにかをはじめよう》2020年
ShishiYamazaki, *Let's Just Get It Started*, 2020

オリジナル作品の発表とともに、国内外の一流ブランドからPV制作依頼も相次ぐ気鋭の作家。自撮りした動きを、ピンク色の多用が特徴的な水彩画風のドローイングに変換し、リズムカルなアニメーションを生み出す。

トークやイベントなど多様なプログラム

トーク・セッションやパフォーマンス、イベントなどを開催。展示や上映だけではなく様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場をお届けいたします。

|| ラウンジトーク 東京都写真美術館 (無料)

カジュアルな雰囲気なかで、作家や作品の背景に触れる「ラウンジトーク」を開催いたします。映像というメディアについてさらに理解を深め、発見を促す機会を提供します。

|| シンポジウム 東京都写真美術館 1F ホール (有料チケット制)

「展示」「上映」プログラムと連動し、テーマにちなんだ「シンポジウム」を実施し、豊かな議論を喚起していきます。

|| イベント ザ・ガーデンルーム (有料チケット制)

ザ・ガーデンルームでは、映像に関連する「イベント」を実施いたします。

プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式サイト (www.yebizo.com) で発表いたします。



【展示出品作家】三原聡一郎 ラウンジトークの様子
第12回恵比寿映像祭 (会場：東京都写真美術館) より
撮影：新井孝明



ライブ・イベント [フェスティバル連携 | 恵比寿映像祭×デジタル・ショック共催企画] SKYGGExAi.step 日仏アーティスト共演：
AIと人間による音と映像のライブパフォーマンスの様子
第12回恵比寿映像祭 (会場：ザ・ガーデンルーム) より
撮影：新井孝明

映像文化の楽しさを地域と共に発信！「YEBIZO MEETS」

恵比寿地域に点在する文化施設やアート団体と連携し、恵比寿映像祭のテーマに合わせたそれぞれ独自の視点によるプログラムや参加型のプログラムを「YEBIZO MEETS」という呼称で開催いたします。多様な映像表現や映像文化の楽しさに出会う「開かれた」機会として、作品を体感し理解するプログラムや地域を巡るスタンプラリー、地域連携プログラムなどを実施いたします。ぜひお楽しみください。



MA2 Gallery



NADiff a/p/a/r/t

MEM

AL



Rocky Shore



- ・ 公益財団法人日仏会館
- ・ YEBISU GARDEN CINEMA
- ・ MA2 Gallery
- ・ MuCuL
- ・ NADiff a/p/a/r/t
- ・ MEM
- ・ AL | TRAUMARIS
- ・ NPO法人アーツイニシアティブ トウキョウ [AIT/エイト]
- ・ Rocky Shore
- ・ アートフロントギャラリー

会場構成 (予定)

③ ザ・ガーデンルーム

東京都目黒区三田1-13-2 恵比寿ガーデンプレイス内

イベント

① 東京都写真美術館

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

展示 上映

ラウンジトーク

シンポジウム

② 日仏会館

東京都渋谷区恵比寿3-9-25

展示 シンポジウム

④ 恵比寿ガーデンプレイス センター広場

東京都渋谷区恵比寿4-20 恵比寿ガーデンプレイス内

イベント

⑤ 恵比寿地域文化施設およびギャラリーなど

地域連携プログラム参加施設・団体：
公益財団法人日仏会館 | TMF日仏メディア交流協会 / YEBISU GARDEN CINEMA / MA2 Gallery /
MuCuL / NADiff a/p/a/r/t / MEM / AL | TRAUMARIS / NPO法人アーツニシアティヴトウキョウ
[AIT/エイト] / Rocky Shore / アートフロントギャラリー

YEBIZO MEETS [地域連携プログラム / 地域発信プロジェクト]

お問合せ

【恵比寿映像祭に関するお問合せ】 ※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当 (東京都写真美術館) : 柳生 (やぎゅう)、坂元 (さかもと)
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL : 03-3280-0034 / FAX : 03-3280-0033 / E-mail : yebizo_press@topmuseum.jp

【プレスリリース/広報用画像/ご取材に関するお問合せ】

恵比寿映像祭プレスコンタクト担当 株式会社ジュンプロモーション : 小原 (おばら)、川上 (かわかみ)
TEL : 03-3402-5136 / FAX : 03-3479-1246 /
携帯 (小原) : 090-9854-9542、(川上) : 080-3003-6684 / E-mail : info@junpro.co.jp

※ 本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しております。
ご希望のプレスの方は、①ご希望画像の作品名 ②貴媒体名 ③掲載予定時期
を表記のうえ、上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

※ 12月に作家作品の詳細決定後、2次リリースを発表予定です。
詳細は、恵比寿映像祭公式サイト (www.yebizo.com) でお知らせいたします。

※ 出品作品および出品作家など事業の内容については、変更する場合があります。
※ 新型コロナウイルス感染拡大状況、その他の事情により、実施内容が変更となる場合があります。予めご了承ください。